

エジプト学研究第 21 号 2015 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

目次

〈序文〉	吉村作治	3
〈調査報告〉		
2014 年 太陽の船プロジェクト 活動報告	黒河内宏昌・吉村作治	5
第 7 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報		
近藤二郎・吉村作治・河合 望・菊地敬夫・柏木裕之・竹野内恵太・福田莉紗		19
〈特別寄稿論文〉		
年輪年代学とエジプト学	ピアース ポール クリースマン・ジェフリー S ディーン	45
〈研究ノート〉		
中王国時代の装身具利用からみた埋葬習慣の地域性	山崎世理愛	59
〈修士・卒業論文概要〉		
エジプト先王朝時代における石製品研究		
—その生産と流通からみた地域統合過程の変遷を中心に—	竹野内恵太	79
「古代テーベとそのネクロポリス (The Ancient Thebes and its Necropolis)」における		
遺跡の保存と活用	福田莉紗	87
古代エジプト古王国時代から第一中間期における王権観	松永修平	96
〈活動報告〉		
2014 年度 早稲田大学エジプト学会活動報告		103
2014 年 エジプト調査概要		107
〈編集後記〉	近藤二郎	113

The Journal of Egyptian Studies Vol.21, 2015

CONTENTS

Preface	Sakuji YOSHIMURA.....	3
Field Reports		
Report of the Activity in 2014, Project of the Solar Boat	Hiromasa KUROKOCHI and Sakuji YOSHIMURA.....	5
Preliminary Report on the Seventh Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition	Jiro KONDO, Sakuji YOSHIMURA, Nozomu KAWAI, Takao KIKUCHI, Hiroyuki KASHIWAGI, Keita TAKENOUCI and Risa FUKUDA.....	19
Articles		
Dendrochronology and Egyptology	Pearce Paul CREASMAN and Jeffrey S. DEAN.....	45
Regional Variability of Personal Adornments and Burial Customs in the Middle Kingdom	Seria YAMAZAKI.....	59
Summary of the Recent Undergraduate Theses.....		79
Activities of the Society, 2014-15.....		103
Brief Reports of Fieldworks in Egypt, 2014.....		107
Editor's Postscript.....	Jiro KONDO.....	113

第7次ルクソール西岸 アル＝コーカ地区調査概報

近藤 二郎*¹・吉村 作治*²・河合 望*³・菊地 敬夫*⁴
柏木 裕之*⁵・竹野内 恵太*⁶・福田莉紗*⁷

Preliminary Report on the Seventh Season of the Work
at al-Khokha Area in the Theban Necropolis
by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo*¹, Sakuji Yoshimura*², Nozomu Kawai*³, Takao Kikuchi*⁴,
Hiroyuki Kashiwagi*⁵, Keita Takenouchi*⁶, and Risa Fukuda*⁷

Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University has carried out clearance, conservation and documentation at the tomb of Userhat, Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III (TT 47), and other tombs in the vicinity at Al-Khokha Area in the Theban Necropolis since 2007. Although the tomb of Userhat is one of the most important private tombs from Amenhotep III's reign, no comprehensive scientific research has been undertaken because its exact location had become unknown even after Howard Carter wrote its short report in 1903.

In the previous seasons, we rediscovered the tomb of Userhat, consisting of the forecourt, doorway, columned transverse hall, and inner hall. Notably, we found the entrance of the tomb bearing decorated lintel and doorjambs on both sides with hieroglyph inscriptions, which was not reported by Howard Carter. We also found the relief decoration depicting Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy, which was reported by Howard Carter. In fact, Queen Tiye's portrait in this scene is now in the collection of the Royal Museums of Art and History, Brussels. At the inner hall, we found a couple of statue, probably of Userhat and his wife, was carved in the south wall of the hall. In the last season, excavations were continued in the rear part of the transverse hall where Amenhotep III and Queen Tiye are represented. We also revealed a large portion of the southern part of the forecourt by removing a great amount of debris.

In this season, we continued clearance at the tomb of Userhat (TT47) and its vicinity in order to obtain more information related to the tomb. Clearance was mainly conducted in three areas. We began cleaning the southern part of the forecourt, which had been accumulated with limestone blocks, chippings, and debris from ancient

* 1 早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長
* 2 早稲田大学名誉教授 / 東日本国際大学副学長・教授
* 3 早稲田大学高等研究所准教授 / カイロ・アメリカン大学客員教授
* 4 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 5 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
* 6 早稲田大学大学院文学研究科博士課程
* 7 早稲田大学大学院文学研究科修士課程

* 1 Professor, Faculty of Letters, Arts, and Sciences, Waseda University/ Director,
Institute of Egyptology, Waseda University

* 2 Professor Emeritus, Waseda University/ Vice President and Professor,
Higashinohon International University

* 3 Associate Professor, Waseda Institute for Advanced Study, Waseda University /
Visiting Professor, Department of Egyptology, The American University in Cairo

* 4 Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinohon International
University

* 5 Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinohon International
University

* 6 Doctoral student, Department of Archaeology, Waseda University

* 7 MA student, Department of Archaeology, Waseda University

to modern times. In the middle of the southern wall of the forecourt, we found a tomb entrance that leads to an unfinished tomb(KHT01). Also, it was found that this unfinished tomb is connected at its rear part with a Ramesside tomb belonging to Khonsuemheb, chief brewer of the temple of Mut(KHT02). The second area of the work was the northern part of the transverse hall of TT47 in order to map the plan and elevation of the tomb. The third area is the area to the east of the forecourt of TT47. In this area we removed the sand accumulation in order to find the access to the forecourt.

1. はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972年1月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974年1月にコム・アル＝サマク（魚の丘）において、新王国時代第18王朝アメンヘテプ3世時代の彩色階段を発見した¹⁾。この発見を受けて、アメンヘテプ3世時代の遺構をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ3世の王宮であるマルカタ王宮址、アメンヘテプ3世時代のルクソール西岸岩窟墓や王家の谷・西谷のアメンヘテプ3世王墓の調査などを実施してきた²⁾。

こうした一連のアメンヘテプ3世時代の研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は、2007年度

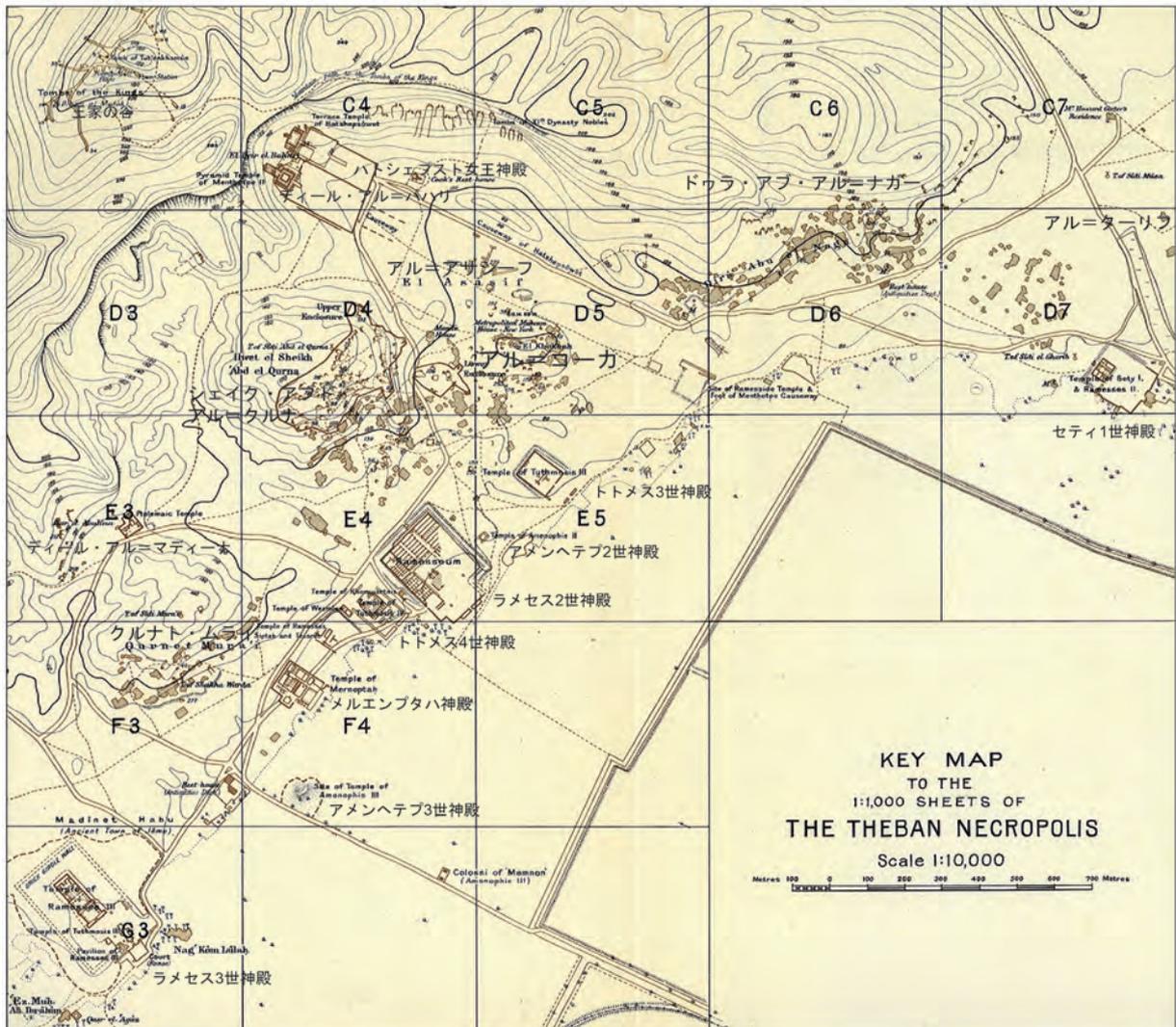


図1 ルクソール西岸地図 (Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000)

Fig.1 Map of Theban Necropolis

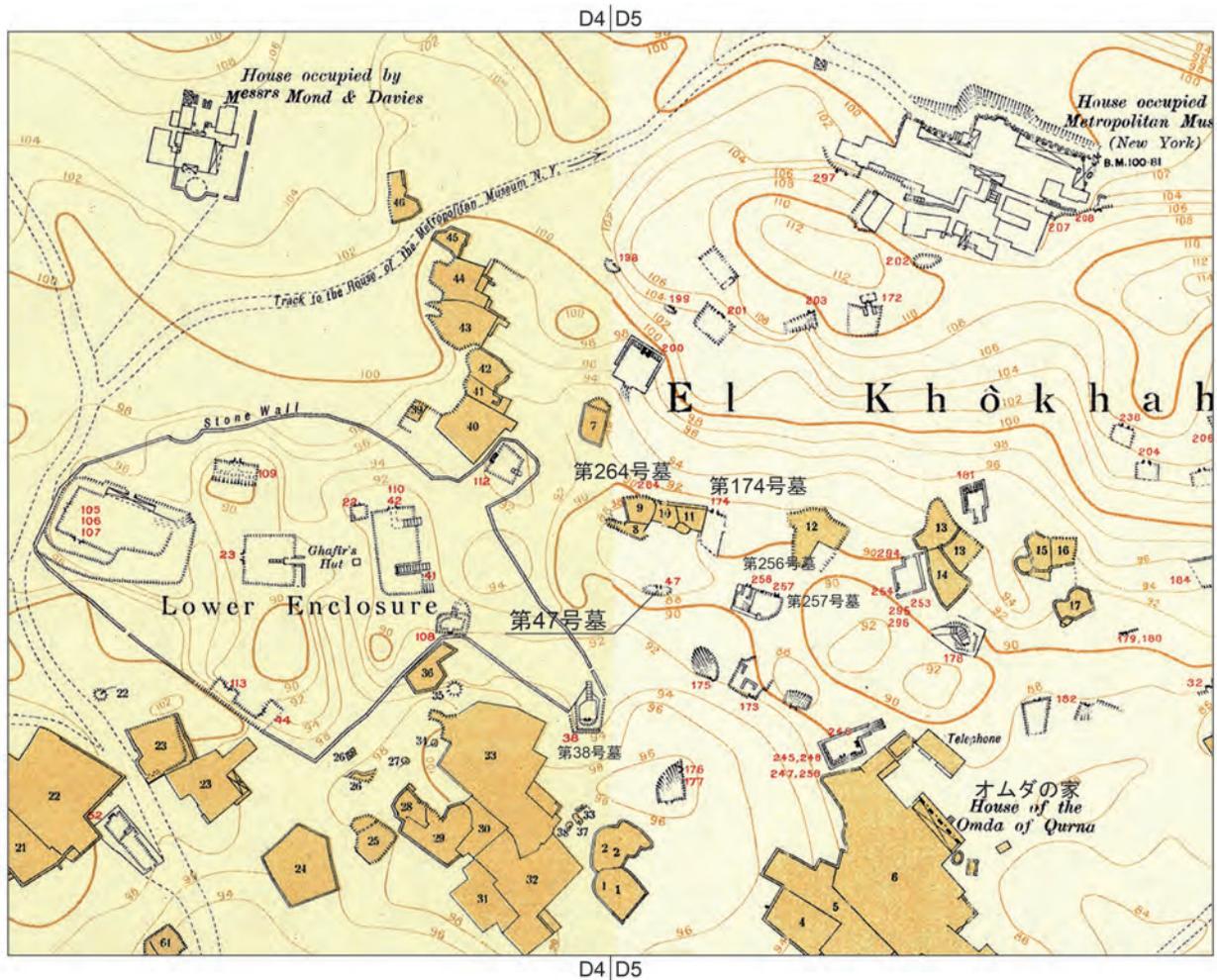


図2 アル=コーカ地区地図 (“Map of the Theban Necropolis” of Survey of Egypt from 1922 to 1924 を一部改変、スケール 1:2,000)
Fig.2 Map of al-Khokha area

から新たにルクソール西岸、アル=コーカ地区に位置するアメンヘテプ3世時代の岩窟墓、第47号墓を対象に調査を開始した(図1, 2)。調査の対象とした第47号墓は、アメンヘテプ3世の後宮(ハーレム)の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ3世時代の高官墓に特徴的な、良質なレリーフ装飾と列柱を備えた大型岩窟墓の1つとして極めて重要である。本調査では、墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓の特質と発展を解明することを目的としている³⁾。

第47号墓はH.A. ラインド(Rhind)やH. カーター(Carter)などの報告により19世紀からその存在が広く知られていたものの⁴⁾、総合的な調査は実施されておらず、墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。こうした状況を受けて早稲田大学エジプト学研究所は、2007年12月にアル=コーカ地区において第47号墓の再発見・再調査を目的とした発掘調査を開始し、その後、毎年冬に調査を継続している。第3次までの調査により、これまでカーターなどによって報告されていなかった、第47号墓の入口と入口両脇の脇柱を新たに発見し、墓の入口の詳細を明らかにすることができた。脇柱にはそれぞれ5行の碑文が刻まれており、ウセルハトの称号「王の後宮の長官(*imy-r ipt nswt*)」と「王宮の印綬官の監督官(*imy-r htmtyw nw pr-nswt*)」の称号が認められた。続く第4次調査では、前室天井崩落箇所掘り下げを行い、内部の状況を観察した。第5次調査では、前室奥壁(西壁)の南側で、墓主のウセルハト、アメンヘテプ3世

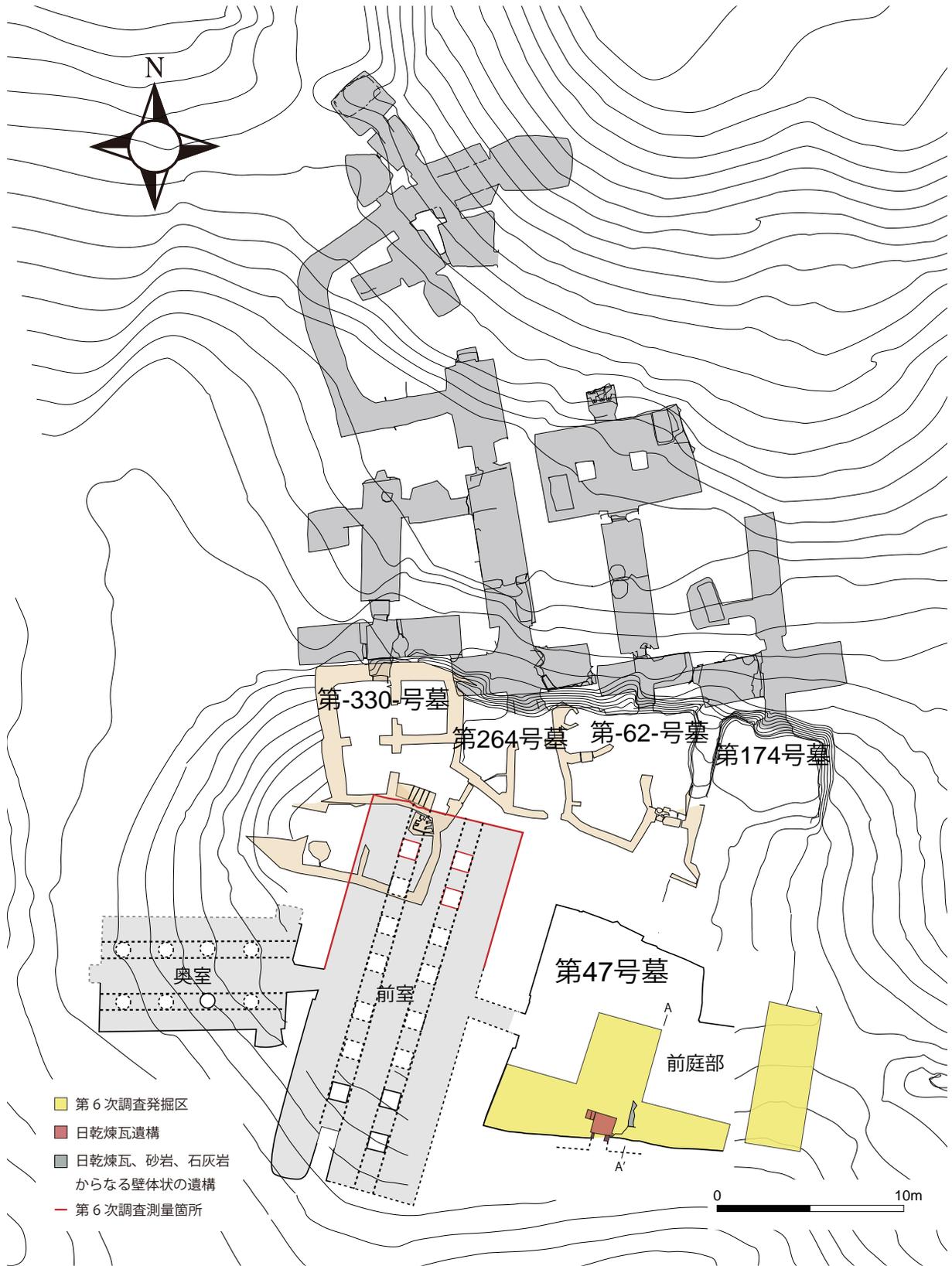


図3 第47号墓およびその周辺地図 (第7次調査終了時)

Fig.3 Map of TT47 and its vicinity

と王妃ティイが描かれた浅浮き彫りのレリーフ装飾と碑文を発見した。現在第47号墓由来の王妃ティイのレリーフがベルギーのブリュッセルの王立美術・歴史博物館に収蔵されているが(E. 2157)、本来装飾されていた場所が明らかとなった。また、併行して、第47号墓の北側に位置する第174号墓、第264号墓の記録調査および保存修復作業を実施した。第6次調査では、さらにこの浅浮き彫りのレリーフのある壁の周辺と前庭部の南側の発掘調査を継続した⁵⁾。

これらの成果を受け、第7次調査では主に第47号墓の前庭部の発掘調査を中心に調査を実施した。第47号墓の前庭部の調査では、前庭部内南側の様相が徐々に明らかとなり、新たに南壁に開口部が発見され、2基の岩窟墓(KHT01, KHT02(コンスウエムヘブ墓))が発見された⁶⁾。本稿では、主に第47号墓前庭部南側の発掘調査と新たに発見された2基の岩窟墓の概要について報告する⁷⁾。

2. 第47号墓の調査

(1) 前庭部内南側の発掘調査

第47号墓前庭部の南側には非常に厚い堆積土があり、前回の第6次調査において、崩落を防ぐための日乾煉瓦製の擁壁が築かれた。これにより前庭部内南側の発掘調査を行った。発掘調査は、前庭部の南西角から開始し、南壁に沿って東に向かって砂礫の除去を行った。南壁のほぼ中央部の砂礫を除去したところ、開口部が検出され、未登録の岩窟墓であることが確認された(写真1)。これを受け、調査日程の都合上、開口部の前にトレンチを設け、集中的に発掘調査を行った。その後、開口部から岩窟墓内部に進入すると東西方向に長軸をもつ柱をしつらえた比較的規模の大きい前室が確認され、岩窟墓をKHT01と命名した。さらに、前室の奥には別の岩窟墓の前室が貫通している状況が認められ、内部の壁面が極めて保存状態の良い壁画で



写真1 第47号墓の前庭部南壁に穿たれた未完成墓(KHT01)開口部

Photo.1 The entrance to the unfinished tomb (KHT01) hewn on the southern wall of the forecourt of TT47

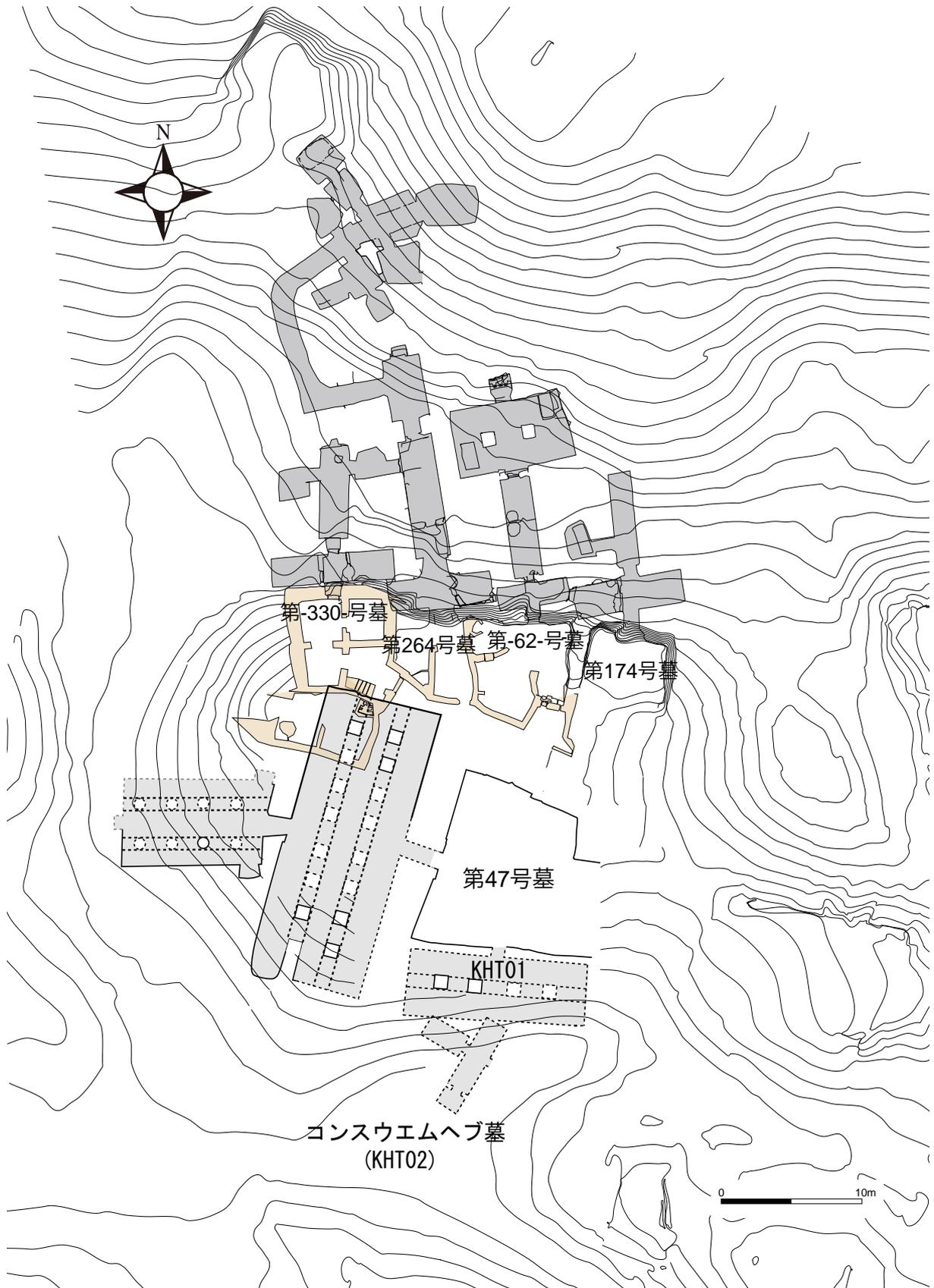


図4 第47号墓、KHT01、KHT02 およびその周辺地図
Fig4. Map of the Site, including the newly discovered tombs

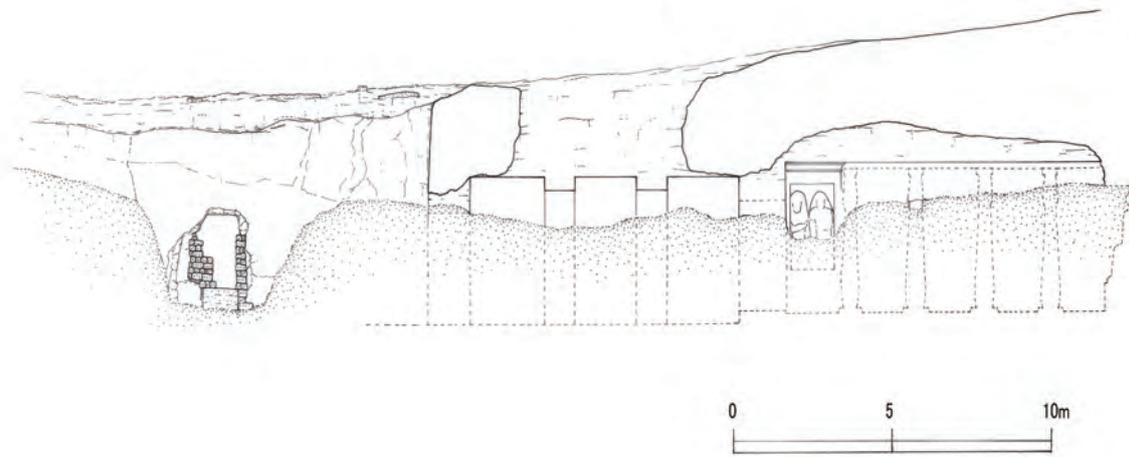
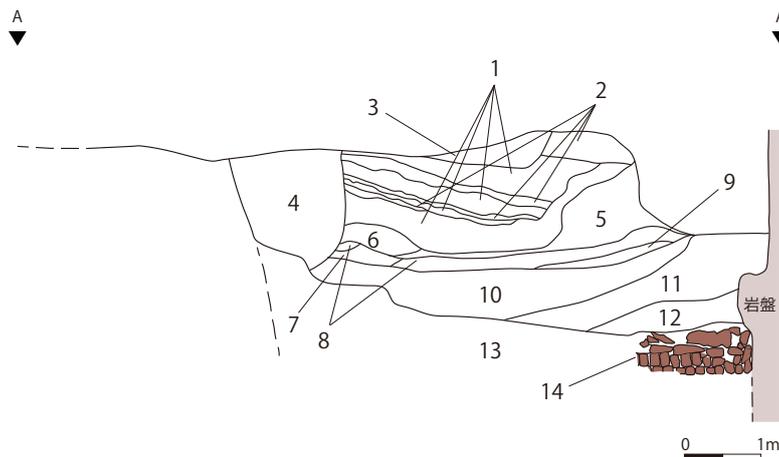


図5 第47号墓立面図（北より南を見る）
Fig.5 The Elevation of TT47, looking from north



- 1 灰色砂層①:近現代のゴミ。藁と糞を大量に含む。灰色砂層②と互層になり、北から南に傾斜している。
- 2 灰色砂層②:近現代のゴミ。小石を含む。灰色砂層①と互層になり、北から南に傾斜している。
- 3 石灰岩チップ層①:表層。小ぶりの石灰岩チップ。
- 4 灰色砂層③:攪乱。細かい藁と糞を大量に含む。
- 5 石灰岩チップ層②:20cm~30cmの幅を持つ石灰岩チップ。
- 6 石灰岩チップ層③:焼けた石灰岩チップ。村民のオープンの破片。
- 7 焼土:泥煉瓦を含む。
- 8 灰白色砂層①:石灰岩チップを少量含む。
- 9 灰白色砂層②:石灰岩チップを多量に含む。
- 10 灰白色細砂層:遺物をほとんど含まない。石灰岩チップと石灰岩の細片を少量含む。
- 11 灰白色砂層③:石灰岩チップを中量含む。
- 12 石灰岩チップ層④:10cm~20cmの幅を持つ石灰岩チップ。表面に白色スリッパを塗布した土器片を多く含む。
- 13 灰白色砂層④:ほとんど混じりけのない砂層。シャブティ、デモティックオストラカが出土。
- 14 壁体状遺構:日乾煉瓦、砂岩、石灰岩からなる壁体状の遺構。

図6 第47号墓前庭部東西セクション図
Fig.6 The East-West Section of the accumulation of the debris in the forecourt of TT47

装飾されていた(図4)。この墓はKHT02と命名され、壁面に記された碑文から被葬者は、コンスウエムヘブという人物であることが判明した。なお、コンスウエムヘブ墓の概要については後述する。

新たに2基の岩窟墓を発見したことで、開口部前において集中的に砂礫の除去を行った。開口部前の砂礫の堆積を除去すると、開口部の両側に脇柱のような日乾煉瓦の構造物が検出された。開口部の両端は本来垂直に整形されていたと思われるが、既に古代に崩落し、崩落欠損部に日乾煉瓦の脇柱をしつらえたようである。さらに、この日乾煉瓦製の脇柱の最下部に接して、日乾煉瓦製の階段付きのプラットフォーム状の構造物が検出された。開口部前の土砂の堆積が灰色砂層から灰白色砂層に変わると、シャブティ像、デモティック・オストラコン、素焼き製のローマン・ランプなどが出土した。この灰白色砂層は、遺物の内容や出土状況から、末期王朝時代からプトレマイオス朝時代の攪乱を受けていない層と判断された。日乾煉瓦製のプラットフォーム状構造物のすぐ東側から北の方向に真っ直ぐに伸びる壁体状の遺構が検出され、日乾煉瓦、砂岩、石灰岩などで構成された一種の壁として機能していたと見られる(図6)。開口部の北側の堆積の発掘では、シャブティ像、葬送用コーン、ジェセルカーラーセネブの名前が刻された砂岩製のレリーフ片、石灰岩製の方形彫像(ブロック・スタチュア)の破片が出土した。

(2) 第47号墓前室の測量調査

これまで第47号墓前室の北側は大量の土砂の堆積と天井部分の崩落により測量調査が行われなかったが、今次調査において測量調査が試みられ、3本の残存する角柱が確認された。この結果を受け、第47号墓の前室は、8本2列、つまり計16本の角柱から構成されていたことが明らかとなった(図3, 5)。

(3) 第47号墓前庭部東側堆積の発掘調査

第47号墓前庭部の東側には厚い堆積があり(図6)、この下に前庭部へ進入するアプローチの存在が想定されている。今次調査も砂礫の除去を継続した。この部分の堆積は灰黒色を呈しており、中には藁などの植物や動物の糞、ロープなどが多く混入されており、近傍住民の家畜小屋の廃棄物が多く堆積したものとみられる。

3. コンスウエムヘブ墓(KHT02)の概要

①はじめに

前述の通り、第47号墓の前庭部南壁のほぼ中央に開口部が検出され、未登録の岩窟墓2基が発見された。開口部は第47号墓前庭部の南に穿たれた墓KHT01の入口であることが確認され、同墓の前室の奥には内部が壁画で装飾されたコンスウエムヘブ墓(KHT02)が確認された。以下では、新たに発見されたコンスウエムヘブ墓の概要について報告する。

コンスウエムヘブ墓は黄色の背景の銘文帯を基調とし、壁画の様式からラメセス朝、特に第19王朝末に年代づけられる。

②被葬者とその家族

被葬者のコンスウエムヘブ(*Hnsw-m-ḥb*)は「ムウトの工房の長(*ḥry n šn^c n Mwt*)」、「ムウト神殿の醸造長(*ḥry ṯḥw n pr-Mwt*)」の称号を持つ人物である。妻はムウトエムヘブ(*Mwt-m-ḥb*)で、「ムウト女神の歌い手(*šm^cyt nt Mwt*)」の称号を持つ。娘の名前はアセトカー(*3st-ḥ3*)で、彼女も「ムウト女神の歌い手」の称号を持っている。ちなみにアセトカーは「彼女の娘」と記されており、コンスウエムヘブと血縁関係のある娘ではなく、連れ子であることがわかる。息子の名前はアシャケト(**š3-ḥt*)とペンアメン(*Pn-Imn*)で、アシャケトは、「ム



写真2 コンスウエムヘブとその家族
Photo.2 Khonsuemheb and his family



写真3 葬送場面

Photo.3 The Funerary Procession Scene



写真4 ラー・ホルアクティとオシリスを礼拝するコンスウエムヘブとその家族

Photo.4 Khonsuemheb and his family worshipping Rahorakhty and Osiris

ウトのウアブ神官」で父コンスウエムヘブと同じ「ムウト神殿の醸造長」の称号を持つ。ペンアメンも父と同じく「ムウト神殿の醸造長」の称号を持つ。

③墓の構造と装飾

コンスウエムヘブ墓は、テーベ西岸の岩窟墓に特徴的な逆T字形のプランをしており、入口は東の方角を向いていた。前室の北壁には被葬者コンスウエムヘブと妻のムウトエムヘブ、そして娘のアセトカーの彫像が彫られていた。前室の南壁は、隣のシャフトのある付属室に接続していた。前室西壁の中央は矩形の奥室に繋がっており、奥室の左奥から埋葬室に通じる階段が穿たれていた。なお、奥室は無装飾であった。

前室の壁面は、天井も含めほぼ全面にわたって装飾されていた（写真2）。北側の東壁には、コンスウエムヘブの葬送の図が描かれており、上段にはピラミッドを頂く墓の礼拝室の前でミイラとなったコンスウエムヘブの遺体に対する儀式の図があり、その背後に悲嘆する男女が描かれている（写真3）。下段にはコンスウエムヘブの遺体を乗せた葬送船が描かれている。同じ北側の西壁には、上段にコンスウエムヘブと妻のムウトエムヘブがオシリス神とアヌビス神に対し礼拝する様子が描かれ、下段にはコンスウエムヘブの息子たちがコンスウエムヘブとムウトエムヘブに供物を捧げる図が描かれている。南側の西壁には、上段にコンスウエムヘブとその家族がラー・ホルアクティ神とマアト女神を礼拝する様子が描かれ、下段にはトト神に導かれたコンスウエムヘブとその家族が背後にイシス女神とネフティス女神を伴ったオシリス神を礼拝する様子が描かれている（写真4）。反対側の東壁は未完成で赤い下絵の線で心臓の計量の図が描かれていた。天井はいくつかの異なる文様で装飾されていたが、特に中央には東側に太陽の船が描かれ、その下に「太陽神への讃歌」の銘文が記され、さらにその下には左右対称に礼拝の姿勢をとるコンスウエムヘブの姿が描かれていた。コンスウエムヘブの顔の部分は黒い顔料で塗られており、後世のものであるが、その時期に関しては明らかではない。

壁画は、保存状態が極めて良好であるが、各所で彩画されたプラスターが剥がれ落ちており、顔料も青系の色は退色が進んでいた。次期調査では、壁画と銘文の観察と同時に、今後の壁画の保存修復へ向けた調査を行う予定である。

4. 主要遺物

今次調査で出土した主要遺物の概要について報告する。

①砂岩製レリーフ片（図7-1）

寸法：高さ24cm、幅45cm

第47号墓前庭部よりジェセルカーラー・セネブ(*dsr-k3-r^c-snb*)とその妻ウアジュレンベト(*w3dt-rnpt*)の名前が記された砂岩製レリーフ片が出土した。これらの夫婦は左側に向かって礼拝の姿勢で表現されている。彼らは第47号墓の南に位置する第38号墓の被葬者で、第18王朝トトメス4世の治世の人物とされている⁸⁾。このレリーフ片は、おそらく第38号墓の入口上部のまぐさ石を構成していたものと推測される⁹⁾。アメン神の名前が刻まれた部分は削られており、アマルナ時代におけるアメン信仰への迫害の痕跡と思われる。以下に翻字と訳を示す。

第1行：[...] *sn-t3 n*

第2行：*wnn-nfr m3^c-hrw in sš ḥsbt*



図7 第47号墓およびその周辺出土遺物 (1)
Fig.7 Major finds from TT47 and its vicinity (1)

第3行：[(n) *Imn jmy-r pr hm-ntr nw n Imn?*]

第4行：*dsr-k3-r(-snb) m3^c-hrw*

第5行：*sn.t=f nbt pr*

第6行：*w3d-rnp.t m3^ct-hrw*

第1行：に対し大地に接吻すること

第2行：ウネンネフェル、声正しき者、会計書記

第3行：アメン (の)、家令、アメン神のヘムネチエル神官？

第4行：ジェセルカーラー (セネブ)、声正しき者

第5行：彼の妹、家の女主人

第6行：ウアジュレンバト、声正しき者

通して訳すと、「アメン (の) 会計書記、家令、アメン神のヘムネチエル神官、ジェセルカーラー (セネブ) 声正しき者、彼の妹、家の女主人、ウアジュレンバト、声正しき者によって、ウネンネフェル、声正しき者に対し大地に接吻すること」となる。

②イピとアメンエムオペトの方形彫像 (図7-2)

寸法：高さ30cm、幅16cm、奥行12cm

この方形彫像片は石灰岩製で、2つの破片からなり、第47号墓の前庭部のほぼ中央部の灰白色砂層から出土した。これらの破片は方形彫像の左側の部分で、右手でレタスを持っている様子がわかる。頭部と足部は欠損している。

彫像片の正面には2行の垂直の銘文があり、約23cmの長さを測る。これら2行の銘文帯の左には、痕跡

からもう1行の銘文帯があったと考えられ、全部で3行の銘文帯で構成されていたと考えられる。中央の銘文帯には、「二国の主の家畜の偉大なる監督官 (*imy-r ihw w[r n nb-t3wy]*)」の称号が記されていたとみられることから、この方形彫像は第47号墓の北に位置する第264号墓の被葬者イピ (*Ipy*) のものであると推測される。第264号墓の被葬者イピは第19王朝のラメセス2世の治世の後期からメルエンプタハ王の治世の人物と考えられていることから、この彫像片も同年代に年代付けられる(近藤他 2010: 66-71; Kamp 1996: 541-543; Porter and Moss 1960: 345)。また、銘文からはアメンエムオペトという名の人物が読み取れるが、彼はイピの親戚と考えられる。以下、銘文の翻字と訳を示す。

第1行: [*htp-dj-nswt n....*] *n k3 n sš nswt jmy-r ihw w[r n nb-t3wy Ipy m3^c-hrw]*

第2行: *n k3 n sš nswt nfrw n pr-Imn Imn-m-int [m3^c-hrw]*

第1行: [王が与える供物・・・] 王の書記、二国の主の家畜の偉大なる監督官、イピ、声正しき者、のカーのために

第2行: アメンの所領の王の徴兵書記、アメンエムオペト、[声正しき者、]のカーのために

③木製彫像 (写真5)

寸法: 高さ約36cm

この木製彫像は、第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口の東側付近から出土した。おそらくプタハ・ソカル・オシリスを表していると思われる¹⁰⁾。彫像は本来表面に彩色が施されていたが、現在



写真5 木製彫像
Photo.5 The Wooden Statue

ではほとんど失われている。頭部の天辺中央部には穴が空いており、おそらく通常のプタハ・ソカル・オシリス像のように、二枚羽根の装飾が付けられていたと考えられる。長さ12cm、幅6.3cmの木製の二枚羽根の飾りも出土しており、下部に臍が付いていることからこのプタハ・ソカル・オシリス像に付属していた可能性がある。また彫像の足の下には立方体の突起部があり、おそらく矩形の台座の臍穴に据えられていたと考えられる。

④ 葬送コーン (図8, 9)

(1) ウセルハト (*Wsr-h3t*) の葬送コーン

今次調査では、銘文の判読可能な葬送コーンが25個出土した。このうち8個が第47号墓の被葬者ウセルハトのものである (D&M#406; Davies and Macadam 1957: #406; Dibley and Lipkin 2009: 133, 252)。今回出土のものを含めると、これまで出土したウセルハトの葬送コーンは25点となる (近藤他 2014: 49)。本稿では6点を報告する (図8)。図8-1は、これまで出土したウセルハトの葬送コーンのなかでも最も保存状態の良いものである。スタンプ面の直径は8.5cm、長さは約17cmである。スタンプ面が欠損した同規格の葬送コーンも多数出土しており、中には四角錐の形態のものもある。特徴的な規格と形態からウセルハトの葬送コーンであると考えられる。

(2) ネンタウアルエフ (*nn-t3-w3-r=f*) の葬送コーン

ネンタウアルエフの葬送コーンが2点出土した (図9-1, 2) (D&M#13; Davies and Macadam 1957: #13; Dibley and Lipkin 2009: 35, 197)。ネンタウアルエフは「育児所の子供 (*hrd n K3p*)」「ウアブ神官の監督官 (*imy-r w'bw*)」の称号を持つ。これらの葬送コーンは、おそらくシェイク・アブド・アル=クルナの彼の墓 (第398号墓) 由来であると考えられる¹¹⁾。年代は第17王朝末から第18王朝のハトシェプスト女王時代以前に年代付けられている。

(3) アアケペルカーラー (*ʿ3-hpr-k3-rʿ*) の葬送コーン

アアケペルカーラーの葬送コーンが1点出土した (図9-3) (D&M#103; Davies and Macadam 1957: #103; Dibley and Lipkin 2009: 57, 210)。アアケペルカーラーは「トトメス1世 (即位名「アアケペルカーラー」) の武器の所持者 (*ʿBy-h'w n '3-hpr-k3-r*)」であり、この葬送コーンはトトメス1世の治世に年代付けられる。彼の墓は確認されていない。

(4) ピイア (*Py-i3*) の葬送コーン

ピイアの葬送コーンが1点出土した (図9-4) (D&M#562; Davies and Macadam 1957: #562; Dibley and Lipkin 2009: 172, 273)。ピイアは「王の供物の書記 (*sš wdḥw n nswt*)」で、妻の名前はネジェムトである。彼の墓は未確認で、年代も新王国時代の具体的な時期は明らかではない。

(5) デイドウ (*dydw*) の葬送コーン

デイドウの葬送コーンが1点出土した (図9-5) (D&M#22; Davies and Macadam 1957: #22; Dibley and Lipkin 2009: 37, 273)。デイドウは、アル=コーカ地区の我々の発掘区北側の丘の斜面に位置する第200号墓の被葬者である (Porter and Moss 1960: 303; Kampp 1996: 485-487)。第200号墓にはアメンヘテプ2世が描かれていることから、同王の治世に年代付けられる。

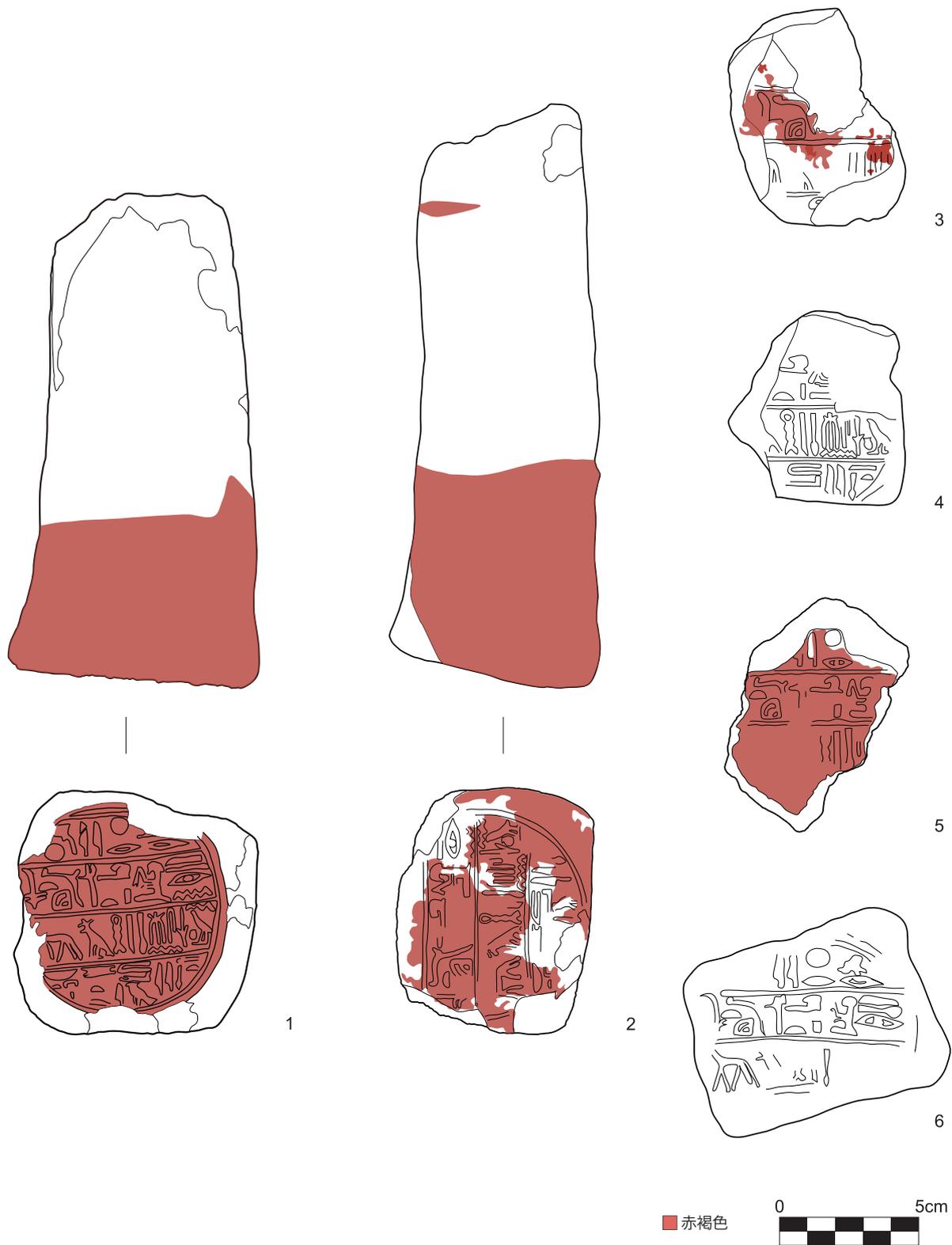


図8 第47号墓およびその周辺出土遺物 (2)
Fig.8 Major finds from TT47 and its vicinity (2)

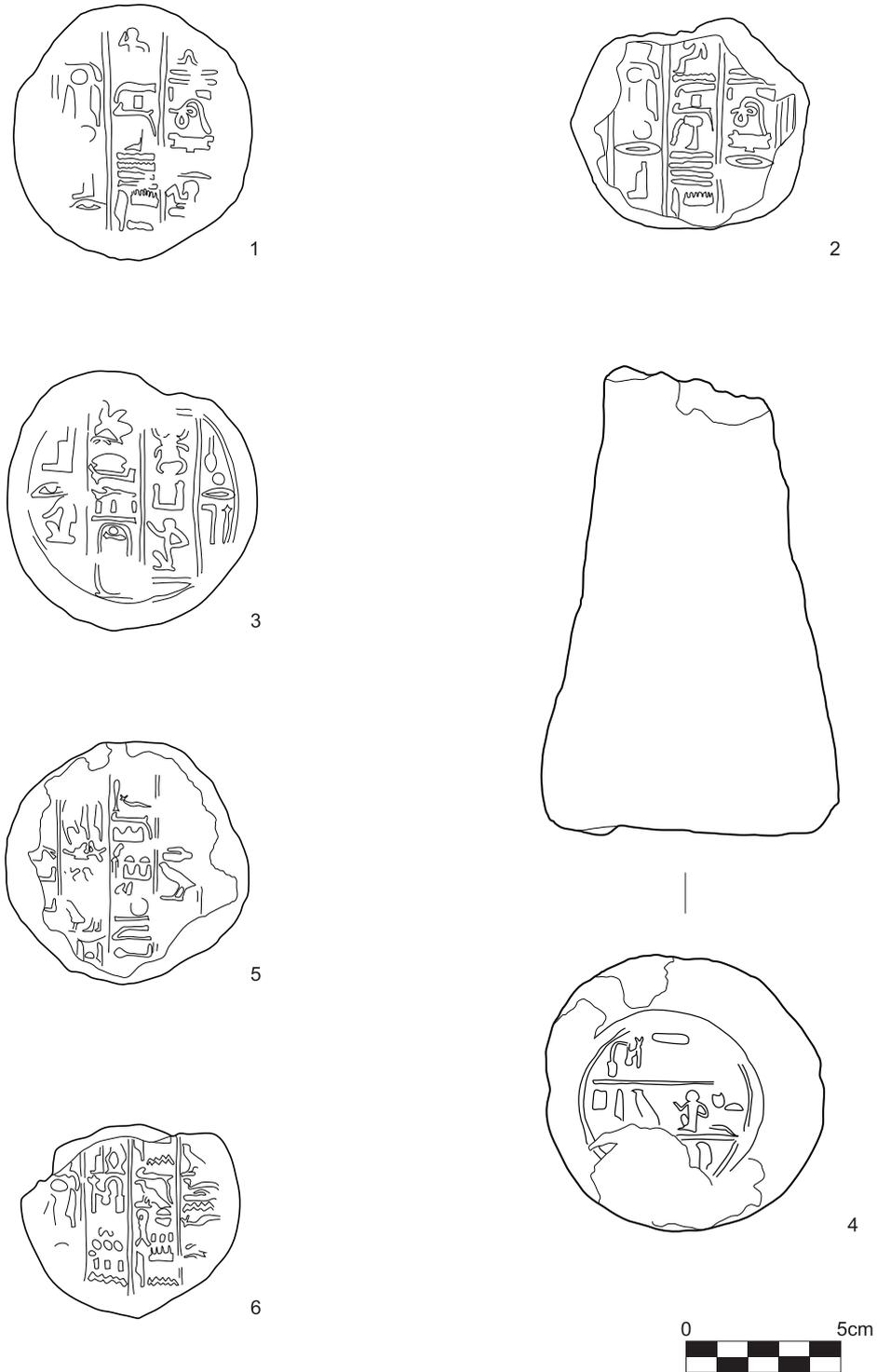


図9 第47号墓およびその周辺出土遺物 (3)
Fig.9 Major finds from TT47 and its vicinity (3)

(6) アメンエムオベト (*Imn-m-ipt*) の葬送コーン

アメンエムオベトの葬送コーンが1点出土した(図9-6)(D&M#73; Davies and Macadam 1957: #73; Dibley and Lipkin 2009: 50, 206)。この葬送コーンのスタンプ面は、かなり磨耗しているが、完形品には、彼の名前とニックネームであるチャネフェル(TA-nfr)が記されている。アメンエムオベトの墓は、メトロポリタン・ハウスの背後に位置するアル=コーカとアサシーフの間の丘陵の頂部に位置する第297号墓と考えられている(Kampp 1996: 567; Strudwick 2003: 5-7)。

⑤ シャブティ像(図10)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口の東側より5体の青色ファイアンス製シャブティ像が出土し、内4体は同じ規格である(図10-1, 2, 写真6)。これらは長さ5.2~6.7cm、幅1.7~2.0cmで銘文は記されていないが、形態の特徴から末期王朝時代からプトレマイオス朝時代に年代付けられる。

その他のシャブティ像は、新王国時代から第3中間期に年代付けられるものが多い。以下では、そのうちの特徴的な4点の土製シャブティ像について報告する。

図10-3は、シャブティ像の上半身で、入念なヌビア鬘を被り、両腕を交差して鍬を持つ人物を表している。図10-4は、ヌビア鬘を被り右手で殻竿状の笏を持ち、長いキルトを身につけている。図10-5は、三裂鬘を被る女性を表し、両腕を交差して鍬を持っている。下部は欠損している。胴体には水平に銘文が記されており、「アメン神の歌い手(*šmꜣyt n(t) Imn*)」の称号を持つ女性であることがわかる。以上3点のシャブティ像は、形態と様式からラメセス朝(第19~20王朝)に年代付けられる。さらに、表面に青白色の顔料が塗られているシャブティ像は、頭に三裂鬘を被り、両腕を交差して鍬を持つ姿で表されているが、下部は欠損している(図10-6)。胴部に垂直の銘文が記されており、微かに*3sir*「オシリス」と読める。背中には黒インクで籠が描かれている。様式から、第3中間期に年代付けられる。

⑥ アミュレット(図10-7)

胴体がミイラの姿で表現されたハヤブサを象った高さ5cmのアミュレットが出土した。おそらくホルスの4人の息子のケベフセヌウエフを表していると考えられる。このアミュレットは濃青色ガラス製で、2つの小さな穴が空いていることから、包帯に包まれたミイラを覆うビーズ・ネットに繋がっていたものと思われる。

⑦ 図像オストラコン(図11-1)

第47号墓前庭部の灰白色の層より図像が描かれたオストラコンが出土した。幅約34.5cm、高さ23.5cmの石灰岩の表面に赤冠を被り首飾りを付けた2人の王の姿が描かれている。2人の王は、赤色で描かれ、右側を向いている。首飾りは部分的に黄色で彩色されている。ディール・アル=マディーナの王墓造営職人の村出土の類例などから、これはおそらく絵師が墓に王の姿を描く際に練習として描かれたものと推測される(Cf. Andrews 2010)。類例は、同じアル=コーカで岩窟墓の調査を行っているハンガリー隊の発掘でも出土している(Bács, Fávián, Schreiber, and Török 2009: 158-166)。

⑧ デモティック・オストラコン(図11-2)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口東側よりデモティック・オストラコンが出土した。高さ20cm、幅17cm、厚さ1.5cmの土器片に記されたものである。土器片の表面には5種類のデモティックの



写真6 ファイアンス製シャブティ
Photo.6 The Faience Shabties



図10 第47号墓およびその周辺出土遺物(4)
Fig.10 Major finds from TT47 and its vicinity (4)



写真7 把手付き袋状土器
Photo.7 Two Handled Bag-shaped Jar

銘文が記されている。4種類の銘文は黒色インクで鮮明に記されているが、1種類は古代に消されたとみられる。年代は、プトレマイオス朝時代からローマ支配期の間と推定される。

⑨彩文土器(写真7、図11-3)

(1) 把手付き袋状土器

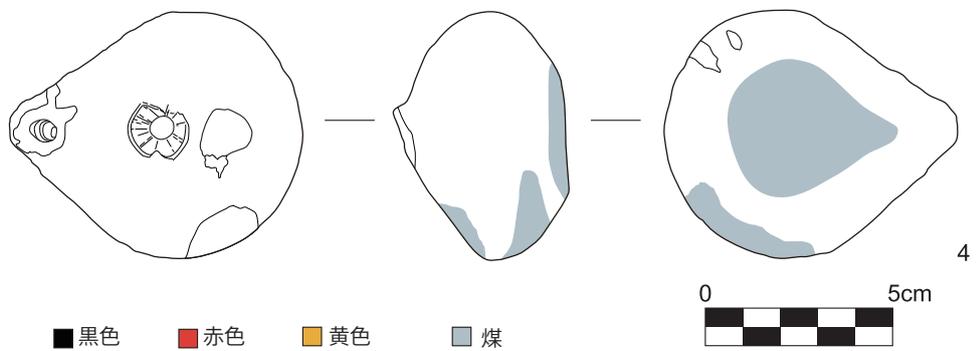
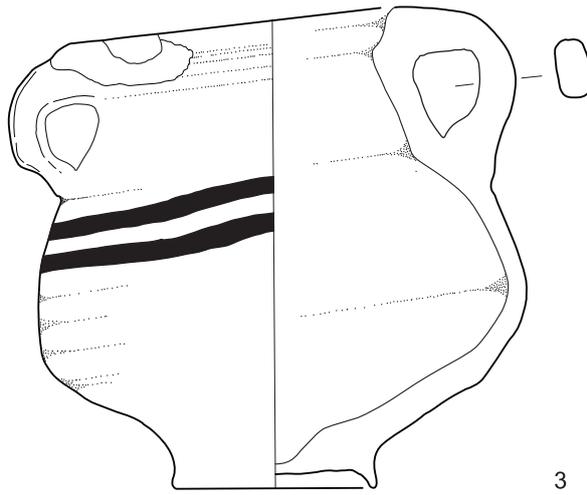
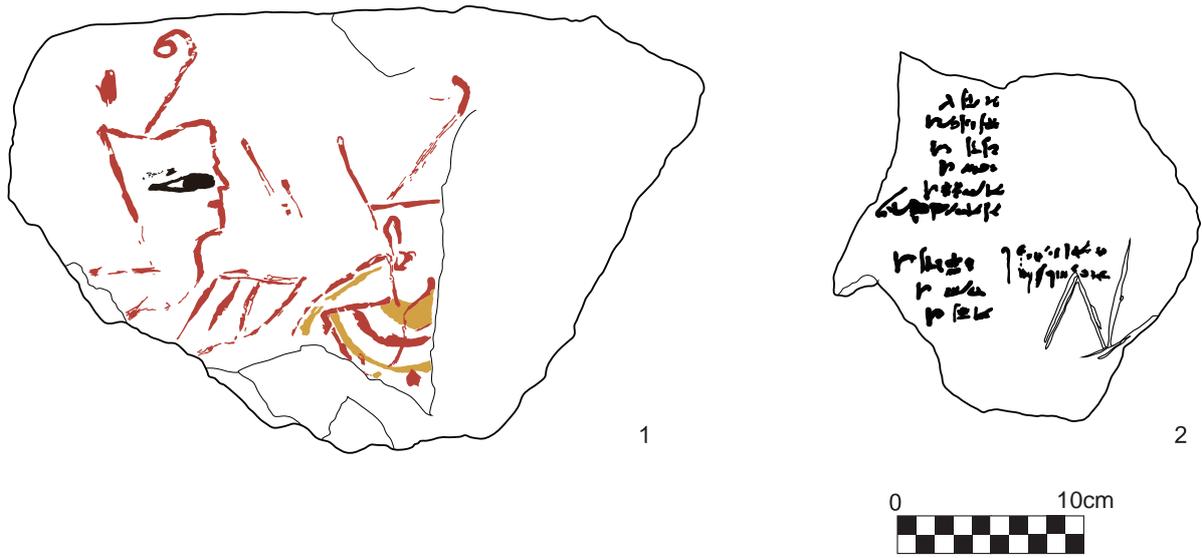
第47号墓前庭部の上層の灰色砂層から袋状あるいは「バラス」のような形態の土器の破片が出土した(写真7)。肩部に垂直状の把手が2つ付けられている。土器の表面は赤いスリップで覆われ、黒色インクで彩文が施されている。彩文は植物文様と帯状の装飾から構成される。同ジャンル=コーカで調査を行っているハンガリー隊により第32号墓から類例が出土しており、プトレマイオス朝時代の前3世紀後半から前2世紀に年代付けられている(Schreiber 2011: 130)。

(2) 高台付き壺形土器

第47号墓前庭部からは前述のようなプトレマイオス朝時代の土器が多数出土しているが、1点ほぼ完形の彩文土器が出土した(図11-3)。口縁部から肩部にかけて2つの把手を持つ高台付きの土器で、胴部が下にいくにつれてやや広がっている。外面には赤色スリップが下地として施されており、彩色は肩部から下に施されており、肩部の中央に2本の帯が濃い紫赤色のインクで描かれている。また、胴部と底部の軸が大きくずれている。類例はディール・アル=シャルウィートのイシス神殿の北側の神殿域から出土しており、ローマ支配期初期(1世紀～3世紀)に年代付けられている(早稲田大学エジプト学研究所編 2005: 265, pl. 5-6, fig. VI-2, 8)。ローマ支配期初期のクラウディアヌス遺跡からは、高台部分が欠損しているが、口縁部から胴部下部にかけて残存する類似した器形が報告されている(Wodzinska 2010: 87, no.17)。

⑩ローマン・ランプ(図11-4)

第47号墓前庭部南壁の開口部、KHT01号墓の入口前よりローマン・ランプが1点出土した。高さは約



■ 黒色 ■ 赤色 ■ 黄色 ■ 煤

図11 第47号墓およびその周辺出土遺物 (5)
Fig.11 Major finds from TT47 and its vicinity (5)



写真8 ナトロン袋
Photo.8 Natron Bag

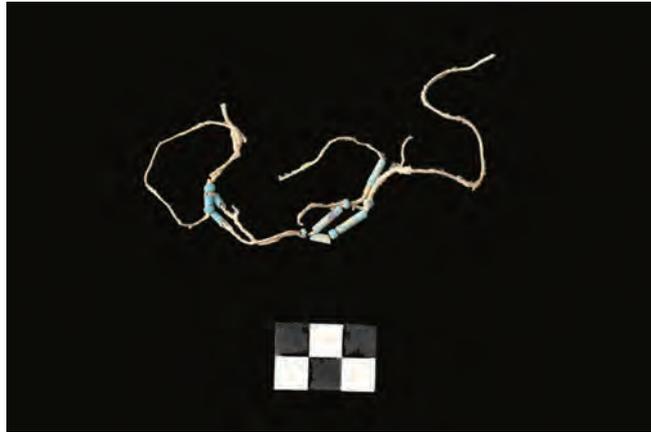


写真9 ビーズ
Photo.9 Beads

4cm、幅約8cmで、蛙型ランプと呼ばれる形態を呈している¹²⁾。表面が激しく磨耗しているため装飾は確認できない。白色スリップが施された表面には煤が付着した痕跡があるが、底部を取り囲むように煤痕があるため、使用時というよりも焼成時のものと思われる。年代は3世紀から4世紀である。

⑪ナトロン袋(写真8)

第47号墓前庭部よりナトロンの袋が2点出土した。両方とも高さ約10cm、幅8～10cmを測る。ナトロンは、亜麻布に巻かれ、口の部分が紐で結ばれている。1点は、保存状態が良好で表面に黒色の樹脂が付着している。

⑫木棺片(図12-1, 2)

彩色された木棺片2点が第47号墓前庭部の灰色砂層より出土した。1点は長さ約19.5cm、幅3cm、もう1点は長さ7cm、幅2cmである。黄色の背景に緑の銘文帯が垂直に描かれ、表面には崩字体のヒエログリフが記されている。

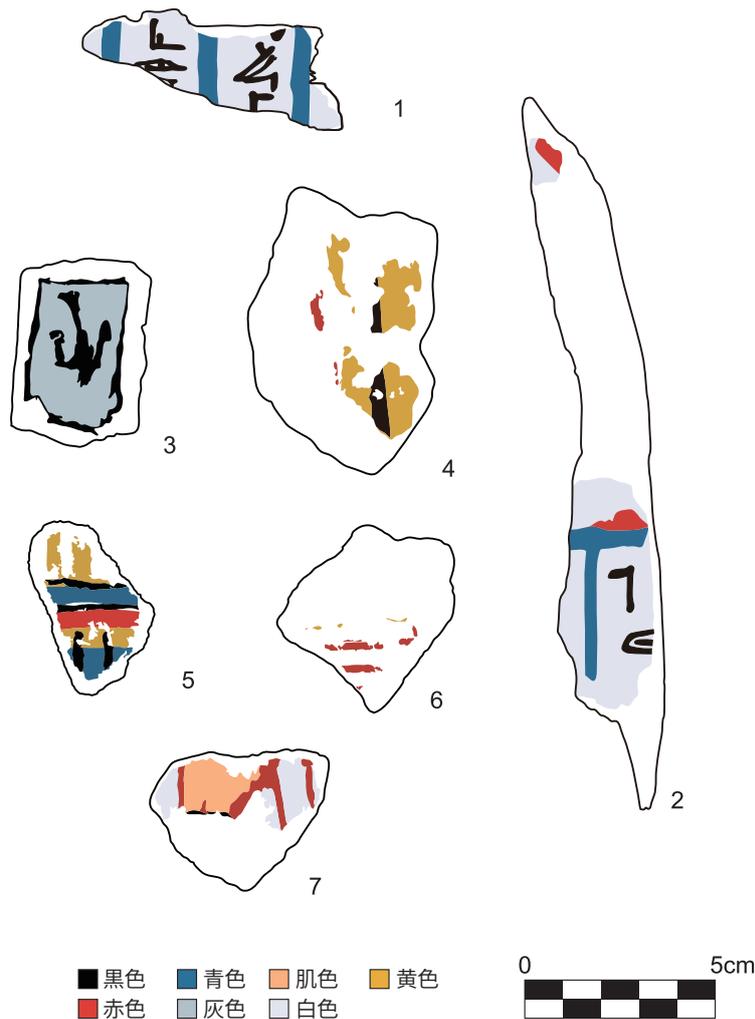


図12 第47号墓およびその周辺出土遺物 (6)

Fig.12 Major finds from TT47 and its vicinity (6)

⑬ 銘文入り装飾板 (図12-3)

第47号墓の灰色砂層より石灰岩製の銘文が記された装飾版が出土した。寸法は、長さ5cm、幅3.5cm、厚さ0.8cmである。灰色に塗られた背景に黒色の顔料で銘文が記されている。この遺物の機能は明らかではない。

⑭ ビーズ (写真9)

青色ファイアンス製のディスク状あるいはシリンダー状の形態のビーズ片が多数出土しており、中には紐が残存しているものもある。これらはおそらく包帯に巻かれたミイラに被せたビーズ・ネットの一部とみられる。

⑮ 彩画片 (図12-4~7)

第47号墓の様々な場所から周囲の岩窟墓の壁面を装飾していたと思われる彩画片が多数出土した。特徴的な4点の破片のうち、3点はラメセス朝に特徴的な黄色の背景を持つ破片で、1点は白色の背景に衣装の一部を表すと思われる、赤いストライプの装飾が施されたものである。

5. まとめ

2013年度の第7次調査では、第47号墓の前庭部の砂礫の除去作業から実施したが、その作業開始から間もなく前庭部南壁のほぼ中央部から開口部が検出され、その奥から KHT01 と KHT02 と名づけた2基の未登録の岩窟墓を新発見した。この発見は、ルクソール西岸クルナ査察局査察官立会いの下で12月29日の昼間におこなわれた。特にコンスウエムヘブ墓(KHT02)の発見は、極めて重要な発見として当初から認識され、セキュリティ上の理由から、上エジプト・ルクソール考古局長の判断で、我々には2日間しかコンスウエムヘブ墓内部の調査が許可されただけで、墓の測量調査などの許可が下りなかった。そのため、本概報の報告はこの2日間に撮影された写真資料を基にしている。コンスウエムヘブ墓の測量等は次期調査に持越しされた。考古省のムハンマド・イブラヒム大臣が、この発見を公式に発表したのが2015年1月4日のことであった。この発表を受け、コンスウエムヘブ墓の発見は世界中のマスコミで報道され、世界的に注目されることとなった。調査隊の帰国後の2014年1月20日に早稲田大学で記者会見を開催した。

コンスウエムヘブ墓などを発見したことで、第7次調査は、第47号墓前庭部の南側部分を中心に調査を実施した。保護用の鉄扉の設置を目指したが、開口部の周囲から階段付きのプラットフォームなどの日乾煉瓦の構造物が検出されたこともあり、第7次調査終了時には鉄扉の設置はおこなわず、開口部は切石・焼成煉瓦・日乾煉瓦などで塞ぎ、セメントで完全に封鎖した。次期の第8次調査では、鉄扉を設置する予定である。また、コンスウエムヘブ墓の調査も簡単な写真記録を中心に実施しただけであり、測量などの作業が、次期調査に残された。前庭部の砂礫除去作業中に、新王国時代からプトレマイオス朝時代、ローマ支配時代など多くの時期の遺物が出土しており、今後、第47号墓周辺の利用状況を考えていく上で貴重な資料である。

以上、第7次調査の成果の概要を述べた。次期調査以降も発掘調査、出土遺構・遺物、保存修復作業を継続し、第47号墓とその周辺の岩窟墓、そして、今回、新発見された KHT01 と KHT02 (コンスウエムヘブ墓) について更に明らかにしていきたい。

謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古省大臣ムハンマド・イブラヒム閣下、古代エジプト部部長ムハンマド・ベアリー、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイル博士、上エジプト総局長マンスール・ボライク氏、上エジプト・ルクソール考古局長ムハンマド・アセム・アブド・アル=サポール氏、カルナク神殿査察局長イブラヒム・ソリマン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長ムハンマド・アブド・アル=アジーズ氏、副局長ヌール・アブドアル=ガファル・ムハンマド氏、ルクソール西岸中央部遺跡チーフ・インスペクターファタヒ・ヤセーン氏、チーフ・インスペクターエズ・アル=ディーン・カマル・ヌービー氏、そして調査隊査察官アマニ・ハッサン・ムハンマド氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた(肩書きは調査当時のもの)。

また、図版の作成には文学部考古学コース4年山崎世理愛さんの協力を得た。ここに記して感謝する。

なお、本研究は早稲田大学特定課題研究(2013B-033)「古代エジプト、テーベ岩窟墓第47号(ウセルハト墓)の調査」(研究代表者:近藤二郎)、科学研究費基盤研究(B)(22404020)「古代エジプト、岩窟墓の掘削技術に関する調査研究」(研究代表者:柏木裕之)、早稲田大学特定課題研究(2013A-975)「古代エジプト新王国時代第18王朝史の再構築」(研究代表者:河合 望)などの助成によるものである。

註

- 1) マルカタ南遺跡のコム・アル=サマク(魚の丘)における調査に関しては主に以下を参照(古代エジプト調査委

- 員会編 1983)。
- 2) マルカタ王宮址の調査は主に以下を参照 (早稲田大学古代エジプト建築調査隊編 1993)。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照 (早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007)。また王家の谷・アメンヘテプ3世王墓における調査は主に以下を参照 (Kondo 1992; 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村 1993; 吉村、近藤 1994; 2000; 河合他 2001; 吉村他 2005)。
 - 3) 第47号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照 (近藤 1994)。その他、アメンヘテプ3世時代の大型岩窟墓については D. アイクナー (Eigner) の論考を参照 (Eigner 1983)。
 - 4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告 (Rhind 1862: 137)、ハワード・カーターによる第47号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告 (Carter 1903: 177-178, pl.II)、A.E.P. ウェイゴール (Weigall) の記述 (Weigall 1908: 125) などが挙げられる。またベルギーのブリュッセル王立美術史博物館には第47号墓由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている (van de Walle et al. 1980: 18-20, figs.3, 4)。
 - 5) これまでの調査については以下を参照 (近藤他 2009; 2010; 2011; 2012; 2013; 2014)。
 - 6) KHT は Khoka Tomb の略で、便宜的にこの略称を使用した。
 - 7) 本調査は、2013年12月23日から2014年1月12日までに実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班: 吉村作治、近藤二郎、菊地敬夫、河合 望、福田莉紗、建築班: 柏木裕之、渉外: 吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。
 - 8) 第38号墓については、Porter and Moss 1960, pp. 69-70; Kampp 1996, p. 228-229; Sakurai, Yoshimura, and Kondo 1988, pls. 4 and 30; Urk IV, 1637-1640 を参照。
 - 9) 類例として、チャヌニ墓のまぐさ石が挙げられる。Brack and Brack 1977, p. 53. Taf. 44a.
 - 10) プタハ・ソカル・オシリス像については、Aston 2009 を参照。
 - 11) 第398号墓については、Porter and Moss 1960: 443, Map IV, V; Kampp 1996: 608.
 - 12) 特徴的な類例は、大英博物館 Q2163 EA – Q2177 EA がある。Bailey 1988:262, pl. 49. を参照。

参考文献

- Andreu, G.
2002 *Les Artistes de Pharaon: Deir el-Médineh et la Vallée des Rois*. Paris, Réunion des Musées Nationaux.
- Aston, D.
2009 *Burial Assemblages of Dynasty 21–25: Chronology-Typology-Developments*, Vienna.
- Bács, T.A., Fábrián, Z. I., Schreiber, G., and Török, L. (eds.)
2009 *Hugarian Excavations in the Theban Necropolis. A Celebration of 102 Years of Fieldwork in Egypt*, Budapest.
- Bailey, D. M.
1988 *A Catalogue of the Lamps in the British Museum, III. Roman Provincial Lamps*, London.
- Brack, A and Brack, A.
1977 *Das Grab des Tjanuni: Theben Nr. 74. AV 19*. Mainz.
- Carter, H.
1903 “Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l’Égypte*, pp.171-180.
- Collins, L.
1976 “The Private Tombs of Thebes: Excavation by Sir Robert Mond 1905 and 1906”, *The Journal of Egyptian Archaeology* 62, pp.18-40.
- Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.
1957 *A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.
- Dibley, G. and Lipkin, B.
2009 *A Compendium of Egyptian Funerary Cones*, London.
- Eigner, D.
1983 “Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Arkitektur”, *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp39-50.
- Helck, W.
1958 *Urkunden der 18. Dynastie*, Heft 21, Berlin.
- Kampp, F.

- 1996 *Die thebanische Nekropole*, Mainz
- Kondo, J.
- 1992 “A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III”, in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41-54.
- 1995 “The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings”, in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25-33.
- Rhind, A.H.
- 1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.
- Sakurai, K., Yoshimura, S., and Kondo, J.
- 1988 *Comparative Studies of Noble Tombs in Theban Necropolis*, Waseda University, Tokyo, Japan.
- Schreiber, G.
- 2011 “Early and Middle Ptolemaic Funerary Art at Thebes (ca. 306-88 BC),” in Z. Hawass, T.A. Bács, G. Schreiber (eds.), *Proceedings of the colloquium on Theban Archaeology at the Supreme Council of Antiquities*, Cairo.
- Strudwick, N.
- 2003 *The Tombs of Amenemopet called Tjanefer at Thebes (TT 297)*, AÄ 19, Berlin.
- van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.
- 1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.
- Weigall, A.E.P.
- 1908 “Report on the Tombs of Shékh abd' el Gürneh and el Assasif”, *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118-136.
- Wodzinska, A.
- 2010 *A Manual of Egyptian Pottery Volume 4: Ptolemaic Period-Modern*, Boston
- Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.
- 2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *MEMNONIA XV*, pp.203-212.
- Yoshimura, S. and Kondo, J.
- 1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.
- Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)
- 2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.
- 河合 望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ
- 2001 「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第9号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-45.
- 古代エジプト調査委員会編
- 1983 『マルカタ南〔I〕 一魚の丘<考古編・建築編>』、早稲田大学出版部。
- 近藤二郎
- 1994 「テーベ私人墓第47号」、『エジプト学研究』第2号、早稲田大学エジプト学会、pp.50-60.
- 近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合 望、西坂朗子、高橋寿光
- 2009 「第1次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第15号、早稲田大学エジプト学会、pp.39-70.
- 2010 「第2次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第16号、早稲田大学エジプト学会、pp.47-77.
- 2011 「第3次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第17号、早稲田大学エジプト学会、pp.45-63.
- 2012 「第4次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第18号、早稲田大学エジプト学会、pp.5-20.
- 2013 「第5次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第19号、早稲田大学エジプト学会、pp.107-120.
- 近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合望、高橋寿光
- 2014 「第6次ルクソール西岸アル=コーカ地区調査概報」『エジプト学研究』第20号、早稲田大学エジプト学会、pp.43-58.
- 吉村作治、近藤二郎
- 1994 「アメンヘテプ3世王墓の調査について エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第7巻第1号、pp.187-199.

- 2000 「王家の谷・西谷調査報告－1992年8月～2000年1月－」、『エジプト学研究』第8号、pp.57-64.
吉村作治、近藤二郎、河合 望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子
- 2005 「アメンヘテプ3世王墓保存修復作業概報：2001年3月～2004年3月」、『エジプト学研究』第13号、pp.5-21.
早稲田大学エジプト学研究所編
- 2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕－第241号墓と周辺遺構－』、早稲田大学エジプト学研究所.
- 2005 『マルカタ南〔V〕－イシス神殿北建物址－』、株式会社アケト.
- 2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕－第318号墓と隣接する墓－』、株式会社アケト.
- 2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕－第333号墓、A.21号墓、A.24号墓、W-4 (Nr.-127-)号墓－』、株式会社アケト.

エジプト学研究 第21号

2015年3月31日発行

発行所 / 早稲田大学エジプト学会

〒169-8050 東京都新宿区戸塚町1-104

早稲田大学エジプト学研究所内

発行人 / 吉村作治

The Journal of Egyptian Studies No.21

Published date: 31 March 2015

Published by The Egyptological Society, Waseda University

1-104, Totsuka-cho, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan

© The Institute of Egyptology, Waseda University